



令和3年度

# 鹿児島県の教育

2・3月号

## 巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事  
県連合校長協会中学校長部会副部長

始良市立重富中学校長  
米山武彦

### 「失ったものを数えるな 残されたものを最大限に生かせ」

昨年夏に開催された東京パラリンピックで胸が熱くなった場面があった。日本の女子選手として初めてパワーリフティングに出場した坂元智香選手の活躍だ。中学三年生時の彼女は、ソフトテニス部に所属し、生徒会役員もこなす大変活発な生徒だった。五年後の成人式で再会した彼女は車いすだった。その後、ずっと気になっていたが、東京パラリンピックで必死にバーベルを挙げ、限界に挑戦している彼女の姿に感動した。車椅子ユーザーになった当時は相当辛かったに違いない。それでも前に進まなければ道は拓けない。彼女は、パワーリフティングでパラリンピックを目指したのである。身体の一部が動かなくても、目標に向かって努力する彼女の姿は、コロナ禍での教育活動とも重なる。

昨年夏に開催された東京パラリンピックで胸が熱くなった場面があった。日本の女子選手として初めてパワーリフティングに出場した坂元智香選手の活躍だ。中学三年生時の彼女は、ソフトテニス部に所属し、生徒会役員もこなす大変活発な生徒だった。五年後の成人式で再会した彼女は車いすだった。その後、ずっと気になっていたが、東京パラリンピックで必死にバーベルを挙げ、限界に挑戦している彼女の姿に感動した。車椅子ユーザーになった当時は相当辛かったに違いない。それでも前に進まなければ道は拓けない。彼女は、パワーリフティングでパラリンピックを目指したのである。身体の一部が動かなくても、目標に向かって努力する彼女の姿は、コロナ禍での教育活動とも重なる。

令和4(2022)年2・3月号

一般財団法人 鹿児島県校長会館  
〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13  
振替 02030-1-3192  
TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷  
鹿児島市東坂元二丁目29-1  
TEL 247-1605 FAX 247-2844

### \* おもな内容 \*

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	17
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	18
子どもが輝く教育	7	専門部だより	19
心に残るひとこと	9	一般財団法人校長会館だより	20
ある日の校長講話	11	編集後記	20



## 「考古学の研究姿勢と子どもたちを観る目」

(公財) 鹿児島県文化振興財団 鹿兒島県文化振興財団  
上野原縄文の森園長 堂 込 秀 人

上野原遺跡は、国内最古・最大級の縄文集落として国の史跡に、集落と異なる地点から出土した遺物は国の重要文化財に指定されています。最近の放射性炭素年代の研究の進展で年代が遡り、九千五百年前の集落は一万年を越え、七千五百年前の重要文化財の遺物は八千五百年前より古いものとなりました。上野原縄文の森は、上野原遺跡の場所に、遺跡の保存・活用と縄文時代を中心とする鹿児島県の発掘調査の成果を展示・活用・研究するために設けられた史跡公園です。それもあって県立埋蔵文化財センターも併設されています。

私たちの活動の基盤となる考古学の学問的な基礎となる研究対象は、人類の過去の生活や文化の痕が残された遺跡・遺構・遺物などの考古資料です。それをいろいろな研究法に基づいて分類・記述・分析して、過去の人類の歴史を叙述することが考古学の目的となります。この考古学の研究で一番気を付けることは、先入観の消除です。先入観があつては、観察・記録も偏つてしまいます。観察や記録、報告、論文は後から批判的に検討されるので、その人の考え方が丸裸にされてしまいます。おまけに発掘調査に

より消滅してしまった物については取り返しがつかないので、大きな責任があります。とにかく最初は、知識があつても囚われなことが最も重要です。そして、研究が進むにつれて、私たちが忘れ去った自然の利用方法や、暮らし方が分かってきています。こうした研究の中では「このはずである」「こうあるべきである」が最もいけません。そもそも昔の人々は、私たちの知らない物を素材とし、独自の技術・方法で製作・利用している可能性があるからです。

新しい切り口の研究も考古学では進んできています。放射性炭素での年代測定は知られてきました。放射線に付いたおこげなどから炭素・窒素安定同位体比分析や残存脂質分析でどんな物を食べたかの調査や、土器についた圧痕からカゴなどの編組製品の素材・技術の研究と有用植物や害虫の研究、人骨からのDNA研究による人類の由来と進化の研究、イノシシなどによるDNA研究から人の関わりを探る研究などです。最近、土器圧痕の分析を進めている熊本大学の小畑弘己教授が、北海道福島町の縄文前期、中期の館崎遺跡の土器(約五千年前)に、コクゾウムシを粘土に混ぜ込んで作ったものがあり、

### 略 歴

一九八三年四月 鹿児島県高等学校教諭  
(初任 穎娃高校)  
二〇一九年三月 県立埋蔵文化財 センター所長 退職  
二〇二一年四月から 上野原縄文の森 園長  
七月から 鹿児島県考古学会会長

土器の内部の空隙をCTで撮ることで確認しました。コクゾウムシはご存じのとおり貯蔵穀物の加害害虫です。先入観に囚われずCTをやってみたとところにこうした発見があります。

真理の追究に「権威」もいけません。仕事をやりやすくするために利用しても、研究の拠り所になつてはいけません。拠り所は、客観的な証拠と証拠からの論理性ですし、科学的な批判は極めて重要です。真理に至る道も一つでなく、いくつもあるはずです。

こうした考古学の研究態度は教育に通じているのではないかと思っています。子どもたちを平等性智に観ることができているか。現代は教職員も親も、多忙化と生活に追われて感性を働かせる暇がなく、子どもを肯定的に捉えることができなくなつてしまっているのではないかと心配しています。教職員・親・大人が自ら興味・関心を揺り動かし楽しんで、子どもたちと経験を共有することで、子どもたちに寄り添うことができるのではないかと考えます。いろんなことで、子どもたちと共有する時間と感動を楽しんでいただきたいと思います。



## 委ねるべきを委ねて成長を促す

宮内小(始) 鎌田 広文

### 一 はじめに

子どもの成長を促すことが学校教育の本質であり、主体的な学びが大切であることは論を待たないが、私自身、教諭時代も含めて、そのように仕向けてきたかと問われると甚だ自信がない。そこで、「子どもが自ら学ぶための思考の場」という視点で、現在考えていることについて二点述べてみたい。

### 二 互いに聞き合い、教え合う授業を

「自力解決の場」という言葉が出てきて、もう数十年になるだろうか。周知のとおり、特に算数科でよく使われる言葉で、方法や解の見通しを経た後、「まずは自分一人で考えてみよう」という時間である。しかし、この時間を「自力」に拘り過ぎ、固定化してしまふと、苦しい時間を過ごす子どもが出てくる。解決の糸口がつかめずもがいているときに、「あと〇分延長」と言われても、辛い時間が続くだけである。もちろん、担任は机間指導で個別に対応するが、児童数によつては順番待ちとなり、到底最後まで行き着かない。大きな時間の無駄ともなり得る。

ここを、自由に聞き合い、教え合う場とし

て、子どもたちの判断に委ねたい。教師側からの「友達に聞いていいよ。」等の言葉を待つのではなく、自分で判断して、解決できた友達に能動的に聞きに回る。隣同士に絞るのではなく、学級内を自由に動いて誰に聞いてもよいことにする。もちろん、単なる解(結果)ではなく、考え方を理解しよう求めていく。聞かれた側も、自らの言葉で、分かりやすく説明することを心掛けさせる。ラーニングピラミッドでは、「人に教えること」が最も学力の定着に有効とされている。教えるためには、自らの考えを整理し、順序立てて説明する必要がある。教える側自身の思考もより高まるはずである。

### 三 「事前に」ではなく「時中の思考」で

先日、むし歯予防教室が開かれ、四年生が、歯科医師の講話を聞いた。その時、一人の子児童が約三十分ほどの講義の間、ずっとメモをとり続けているのに気が付いた。その理由は、後で分かった。お礼の言葉を述べる役だったのである。彼女は、歯科医師の説明に出てきた語句をいくつも使い、まさに生きた言葉でお礼を述べた。見事だった。その子の

資質もあるだろうが、四年生でここまでできるのかと感じた。

私たちは、各行事等で「お礼の言葉」などを子どもに任せるとき、事前に全てを準備させておくこともよくあるのではないだろうか。そうすれば、確かに失敗はなく無難に終わる。しかし、それでは当たり障りのない表現にしかならず、聞く者の心には響かない。子ども自身が、その時に得た知識や感動を、自らの言葉で紡ぐのが本来の姿であるはずだが、そうでない場面を見ることがこれまで多かった。今回、その場で思考させることの大切さを強く感じた。もちろん、個々の実態に応じて支援の工夫は必要であるが、基本的に時中に思考させる形で臨みたい。そして、そのような経過を経て出てきた言葉に対しては、多少稚拙であっても、大いに褒め、認めてあげたいものである。結果ではなく、その過程が子どもたちを自ら成長させると信じてみたい。

### 四 おわりに

一については、本校の指導法改善の基盤に据えている。まだまだ途上ではあるが、授業中、子どもたちが活発に動き回って教え合っている姿をよく見るようになった。二については、学校便りで保護者にも紹介し、「家庭でも子どもに任せるところは任せ、高所から見守りましょう。」と啓発している。子どもを鍛えるには様々な方法があると思うが、「委ねる」ことも視点の一つとして考えていきたい。



## GIGAスクール構想を推進するにあたり

高山中(隅) 有村 哲 郎

### はじめに

平成元年の中学校学習指導要領の改訂に伴い技術・家庭科の指導内容に「情報基礎」が加えられた。この頃からワープロ専用機に代わり学校にコンピュータが入り始めた。当時の中学校技術・家庭科「情報基礎」は、コンピュータの操作を通して、コンピュータの役割と機能について理解させ、コンピュータを適切に利用する基礎的・基本的な能力を養うことや、体験を重視し、コンピュータの役割や機能などを、系統的に中学校段階で教えることであった。平成十年の改訂で「情報とコンピュータ」と名称が変わり、指導に当たる時間が大幅に増加した。今回の改訂では小・中学校にプログラミングに関する内容が拡充された。

一方、社会ではパソコンや携帯電話の個人所有が増え、さらにタブレットやスマートフォンが登場により、あらゆる場面において利用されるようになってきた。端末への入力やキーボード入力が主流であるが、音声入力や画像からテキストを判別し取り込んでくれるようになってきた。若者の中には、スマートフォンでのフリック入力やテキスト入力が入力できる反面、キーボードを用いてパソコン等への入力を苦手としている者も多いらしい。また、スマートフォンのみでパソコンを所有していない若者も多いと聞く。企業はパ

ソコン操作に不慣れな新入社員への指導に苦慮されているらしい。

三十年余りで情報教育を取り巻く環境は著しく変化した。今、文部科学省の推進するGIGAスクール構想による一人一台パソコン配備が進められ、各学校により様々な取組が始められているが、市町村の事情により環境の違いやデータ等の移動が難しいなど課題も抱えている。

### 二 取組内容

本町では、一人一台の端末として昨年度末にiPadが配布され、どこでも使えるLTE仕様となっている。そのため校内のみならずWi-Fi環境が無くともどこでも利用できるようになってきている。四月当初は、学級のタブレット保管庫の中にあることが多く、授業でも使用している場面を見ることが少なかった。先生方が、どの場面で利用することができているのか手探り状況で、結果的に従来の指導に落ち着いている現状であった。一学期に利用の方法について校内研修会を実施し、タブレット端末を利用して、どのようなことができるのかの研修を行った。

ICTを活用することで業務の効率化を図るためGoogleフォームを利用して学校評価を一学期末に実施したり、授業参観など保護者の出欠の確認等もGoogleフォーム等に随時移行したりしている。このことに

より、担任による出欠票の回収業務が無くなった。

二学期当初、集会活動がコロナ感染拡大防止の観点から難しくなったため、全校朝会や学年朝会もリモート配信で行った。全校朝会では、画面共有を利用してスライドを用いて講話を行い、学年朝会では一人一端末を持たせ自宅での利用を想定した実験も併せて行った。二年生の修学旅行で旅行先の写真撮影やまとめをするためにタブレット端末を持たせ実施した。先生方が何に利用できるかが分かり始め、授業の中ではもちろんのこと生徒への各種アンケート調査などもアプリのアンケート機能を利用するなど広がり始めている。

### 三 おわりに

私自身、学校経営の記録はGoodNotes 5を利用し、紙媒体から離れ二年目となった。また、大量の研修会の資料もPDF化し保存することにより、必要な情報を出先でも閲覧できるようになった。どこかに書いていたはずのものも、検索機能を利用し瞬時に探すことができ、探す手間と時間の効率化が図れている。

デジタル端末には様々な機能が備わっている。それらを教職員や子どもたちが、どのような場面において業務や学習で活用していくかが大切である。そのためには、いつでも自由に紙と鉛筆のように利用できるような学校としてのルールや環境を整えておくことが必要である。そして、個人が得られた学びを仲間と共有していくことにより、より深い学びに繋がっていくものと考えられる。まだまだ、本校は試行錯誤しながら取組をしている段階であるため、先進校の取組を参考にしながら積極的に取り組んでいきたい。



## 校訓「やるならやるで しゃんとやれ」 地域や保護者の熱い想いに支えられた伊津部小の教育

伊津部小(大) 山田 吉夫

### 一 はじめに

本校は、昭和三十四年、名瀬小学校と奄美小学校の児童数増加の問題を解消するため、名瀬市の第三の小学校として、旧名瀬中学校跡地に開校した。開校前は、不十分な設備を理由に開校を反対していた保護者たちも、開校が決定した直後から一致団結し、教育環境の整備に努めてきたという記録が残っている。現在でも保護者や地域の団結力が強く、献身的に学校を支える気風を感じる地域である。

本校の校訓「やるならやるで しゃんとやれ」は、第三代水間忠光校長先生の時代から受け継がれてきている。本校の卒業生はもちろん、在校児童や保護者にも、この校訓が強く心に浸透している。創立六十三年目を迎える現在においても、この校訓を学校経営の土台としている。

### 二 学校経営の方針

本校は、「自ら学び心豊かに強く生きぬく伊津部の子の育成」を教育目標に掲げ、「日々前進する学校」(やる気あふれる学校)を目指し、教育活動に取り組んでいる。特色ある教育活動を推進するに当たっては、「伝統の尊重と創造的継承」「校内研修の推進・充実」「共通理解に基づく実践」「三者連携による教

育」を重視している。

### 三 特色ある教育活動

#### (一) さざなみバンド

本校には、開校して二年後に発足した「さざなみバンド」がある。発足当初は、弦楽器を中心としたバンドであったが、現在は、奄美の伝統楽器である太鼓や三味線を使った音楽を受け継いできている。その音楽には楽譜が無く、楽器の演奏から身体表現の仕方に至るまで、全てを上級生が下級生に指導するという点に大きな特徴をもっている。児童が自立していなければ、引き継ぐことができないバンドの伝統である。

この「さざなみバンド」に対する地域の人々の期待は大きく、学校行事だけでなく、島内における様々な行事に出演するなど、地域活動への貢献度も非常に高いバンドである。

#### (二) 黒糖作り体験

総合的な学習の時間に、奄美の歴史と伝統を学びながら、黒糖作りの体験を行っている。奄美農業研究センターの指導の下、四年生の三学期にサトウキビを植え付け、五年生の三学期に収穫している。丸一年かけてサトウキビ栽培から黒糖作りまでの一連の作業を体験している。

#### (三)

民間の清掃業者と連携した清掃指導  
毎週金曜日の掃除時間に、清掃業者の方が来校し、ボランティアで清掃指導に協力してくださっている。学校の要望に応じて、ほうきの使い方や窓の掃除など、学年ごとに指導してくださっている。専門の方の指導を受けることによって、児童の掃除への関心も向上している。

#### (四) 校内読書祭り

本校には、PTAの専門部に読書委員会があり、読み聞かせなど、校内の読書活動を支援している。特に十一月の読書月間に実施する学校行事の読書祭りでは、読書委員会に所属する保護者が、演劇や影絵などを企画し、児童の本への興味・関心を高める活動に貢献している。

#### (五) 花づくり・花いっぱい運動

市の施策の一つとして取り組んでいる「花づくり・花いっぱい運動」では、児童一人一人が、自分の好みで花を選ぶ一人一鉢栽培に取り組んでいる。栽培委員会の児童は、種まき・土作り・仮植・花がら摘みなどの一連の栽培活動に取り組み、全校児童が花とふれあう機会を支援している。また、花で満開になった校内を地域の方にも開放し、散歩コースとして大変喜ばれている。

### 四 おわりに

保護者や地域が学校に関心をもち、協力を惜しまない伝統があるからこそ、教育活動の充実が期待がもてると感じる。校訓「やるならやるで しゃんとやれ」の精神が、地域や保護者と同じように、児童にもしっかりと浸透する教育活動を充実させていきたい。



## 「明るく なかよく ねばり強く」

### 地域で躍動する児童生徒、学校、教職員を目指して 離島にある特別支援学校の取組

中種子養護(熊) 河野 正 寿

## 五 取組の状況と課題

本校勤務は、教頭として高等部設置等に携わって以来二度目になる。本校の雰囲気醸し出す心地良さに触れつつ、学校を取り巻く多様な変化に対応できていない状況もあると感じている。取組や課題を二点挙げたい。

### 一 本校の概要

本校は、熊毛地区を校区とする、肢体不自由又は知的障害及び他の障害を併せ有する児童生徒が通学する特別支援学校である。昭和五十一年度の開校以来長らく小学部と中学部から成る学校だったが、平成二十四年度に高等部設置と通学バス運行開始、平成三十年度に高等部屋久島支援教室開設と発展し、本年度から大規模な校舎改築工事が始まった。現在、五十六人の児童生徒が在籍し、四十九人の教職員で教育活動に取り組んでいる。

本校の経営方針に示した、児童生徒、学校、教職員それぞれの「目指す姿」に沿いながら、主な取組や課題等について紹介したい。

### 二 目指す児童生徒の姿

本校の校訓「明るく なかよく ねばり強く」を取り入れ、次のように設定した。

○ 元気で明るく、学ぶことを喜び、自ら考へ行動する児童生徒

○ 周りの人を思いやり、なかよく助け合い、関わり合いの豊かな児童生徒

○ 目標を持ち、夢の実現に向けてねばり強く努力する児童生徒

### 三 「目指す学校の姿」のために

(一) 安全・安心な教育環境(新型コロナウイルスなど感染症対策の徹底、校舎改築工事への対応、食育や防災、安全指導の充実等)

(二) 児童生徒の夢の尊重(本校独自の「夢応援シート」の作成、個別の指導計画等個別シートを活用した重点目標の共有化等)

(三) 連携強化(家庭環境等個別課題の関係機関や居住自治体との早期からの共有・連携、地域の人的・物的資源の活用、高等学校等と連携した屋久島支援教室の運営等)

(四) 地域支援(巡回相談や「ひまわり相談室」の充実、研修支援、研修機会の提供等)

### 四 「目指す教職員の姿」のために

(一) 研修の充実(本校研究主題に沿った研修、一人一授業研修を通じた授業改善等)

(二) 人権意識の高揚(人権委員会を活用した啓発、心情に寄り添う生徒指導の取組等)

(三) 協働・協業(課題の共有や同僚性の発揮、コミュニケーションによる課題解決等)

(四) 業務改善の推進(会議等の精選、個々の主体的積極的な工夫・取組等)

(一) 業務改善の推進(作ろう!「私の時間」勤務時間内に授業準備や個人研修等に当てる時間をさらに増やすために、校時表の見直しによる授業時間の短縮や会議の縮減等に取り組んだ。また昨年度は「グループウェア活用で」、本年度は「教材・データの共有で作ろう!」「私の時間」を1Actionとした。これは職員自ら主体的に自分の時間を作る業務改善に取り組み、公私共充実することが、学校の教育効果を高めることにもつながると考えて設定した。

(二) 地域支援と啓発(研修支援と課題)

本校開校前から中種子町には「特別支援教育振興会」という組織があり、多くの町民が特別支援教育を支えている。本校は振興会と共催で「なかよう公開授業と研修会」を毎年開催し、教育や福祉等の関係者を対象に授業公開や講演等を行っている。夏季研修会等と併せて今後も地域の特別支援教育推進の一助としたい。市町や学校ごとに温度差はあり、域内の障害理解や特別支援教育の取組状況は十分とは言えない。研修支援や教育資料の紹介、関係機関との連携、実習や就労先の開拓等は、理解啓発の更なる好機会と捉えて取り組みたい。



## 学校応援団ボランティアの積極的活用

開聞小(南) 福元 信之

### 一 はじめに

本校は開聞岳(標高九百二十四メートル)のすそ野に位置し、校区内には枚聞神社やソーマン流しの唐船峠があるため、毎年多くの観光客が訪れている。

今年度の児童数は百三十二人、学級数は八学級、キャッチフレーズは「開聞小のあかるい子」(あいさつ・階段歩行・ルール・一生懸命・言葉遣い)である。

本校では、子ども一人一人を輝かせるため、多くの特色ある教育活動を展開しているが、その活動を支えてくれるのは学校応援ボランティアの皆様である。そこで、本校における学校応援団の活動について紹介する。

### 二 学校応援団組織と年間活動計画

学校応援団は、「地域を知り地域で耕す。」「学校を知り子どもたちの心を耕す。」を合言葉に組織された。学校応援団の充実と活性化を担っているのは、学校応援団協議会と地域コーディネーターである。

#### (一) 学校応援団協議会

委員は、小・中学校長や自治公民館長・老人クラブ会長等十四人である。年三回会議を開き、活動の企画や実施状況の確認・次年度へ向けた課題解決・ボランティアの応募状況等について協議している。

#### (二)

地域コーディネーター

学校応援団活動の中心的な役割を担っている。本校では公民館主事が担当しており、学校と地域のつなぎ役を果たしている。具体的には、「学校からの依頼・要請↓ボランティアの検索・活動依頼↓ボランティアとの事前打合せ↓学校(担任)との事前打合せ↓実際の活動↓活動の反省と点検」という流れになっており、この地域コーディネーターの存在が活動の充実につながっていると、言っても過言ではない。地域ボランティアの人数は毎年増え、現在六十一人と、いうことである。

#### (三) 学校応援団活動計画

令和三年度は年間二十(四十六単位時間)の活動を計画している。年間計画以外にも、その都度必要な活動があった場合は、地域コーディネーターに要請し、いつでも実施が可能な態勢もっている。主な活動計画は次のとおりである。

四月(五年生田植え指導) 五月(二年生硬筆指導、三年生毛筆指導) 六月(三年生市内施設巡り指導、四、六年生毛筆指導、五年生玉結び指導) 八月(五年生稲刈り・脱穀指導) 九月(三年生校区内の史跡・歴史指導、五年生ミシン指導、六年生毛筆指

### 三

児童の反応(感想から)

○校区内の歴史がよく分かりウキウキしました。指導者の先生は本当にすごいです。僕もだれかに教えたいです。(三年生)

○専門の先生から教えてもらいうれしかったです。途中はめられたのでやる気が出ました。これからも習字をがんばっていきます。(四年生)

○田植えから収穫した米の調理まで楽しく活動することができました。イモ植えや田植えをすると地域がどんな所かよく分かりました。(五年生)

○地域に伝わる伝統芸能を習うことができ、貴重な体験になりました。今度は、保存会の活動にも参加したいです。開聞地域は本当にすごいです。(六年生)

### 四 おわりに

これまで数多くの小学校で教育活動を行ってきたが、学校応援団の活動としては本校が一番充実している。令和二年度からは、多くのボランティアを活用した放課後子ども教室も運営しているところである。

今後も学校応援団と共に、子どもたちの学ぶ意欲を高め、更なる体験活動の充実を目指していきたいと思う。



## 「はばたけ けやきっ子」の育成のために

池之原小(隅) 川畑 浩 二

### 一 はじめに

創立百二十九年目を迎え、令和三年度は児童数三百三人、教職員数二十九人、学級数十四学級(通常学級十二学級、特別支援学級二学級)である。

本校区は、大隅半島の中央東部に位置し、東側には、柏原小校区を経て志布志湾が広がっている。学校の周辺には、役場や郵便局、総合センター等の公共施設や商店街があり、教育的に恵まれた環境にある。主な産業は農業で、ビニールハウス栽培による県ブランドのピーマンやきゅうり、大規模経営による早期米の産地として知られ、畜産も盛んである。本校では、学校教育目標に「自主的・創造的に学び、豊かな心を持ち、心身ともに健康で、二十一世紀をたくましく生きる個性豊かな子どもの育成」を、合い言葉に「はばたけけやきっ子」を掲げ、教育活動の充実に取り組んでいる。

### 二 実際

#### (一) ボランティア活動の充実

五・六年生児童は、進級と同時にあいさ

つ、廊下等の清掃等、

ボランティア活動に取り組んでおり、この活動はよき伝統として高学年に引き継がれている。児童は、高学年、最高学年へ進級したことへの自



朝のボランティア活動

覚と責任をもち、友達のために、学校のために何ができるのか考えて行動している。今後も「気付き、考え、実行する」児童が増えることを期待している。

#### (二) 異学年交流の充実

清掃、仲よし体育、遠足など、異学年交流を行っている。上学年の児童が下学年の児童に手本を示したり、アドバイスをしたりしている。この活動を通して、児童間で認め合い、そして励まし、助け合う態度が見られるようになってきている。学校生活の中で、下学年の児童が、「○○兄ちゃん」「○○姉ちゃん」と声をかける様子を微笑ましく思っている。

#### (三) 体験活動の充実

総合的な学習の時間に三年生は枝豆、五年生は稲作の栽培活動、四・六年生は、町の歴史や文化の調査、見学、体験活動を行っている。どの活動も地域の人材を活用した取組を行い、児童が探究的な活動に主体的・協働的に取り組んでいる。

#### (四) ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりの充実

学習内容を理解できず学習意欲が高まらない児童をなくすため、配慮が必要な児童はもちろんのこと全ての児童が主体的に学習に参加することをねらいとして、ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりを行っている。特に授業では、児童一人一人の困り感に目を向け、導入時に「視覚化」による課題提示の工夫、展開時の「共有化」によるペア・グループ学習の工夫、終末時の「焦点化」による教科特有の見方・考え方の工夫を行っている。全ての児童が、「分かる・できる」の授業の実現を目指して研究を深めている。(令和三・四年度大隅地区研究協力校指定)

### 三 おわりに

合い言葉「はばたけ けやきっ子」を念頭に、全ての児童が生き生きと光り輝き、安全・安心で信頼される学校づくりになるように、保護者や地域と連携を図り、チーム池之原として取り組んでいく。



## 長所を三つ以上言えるようになる

黒神小(市) 野間口 勇

「自分が受け持つ学級の子どものたちの長所を三つ以上言えるようになりなさい。」この言葉は、初任校での校長の言葉である。初任校は全校児童千人を超える大規模校で、私は三十九名の子どもたちを担任していた。次の日から私はこのことについて取り組んだ。すると、すぐに長所が三つ以上見つかる子どももいたが、二点までは何とか見付けられるものの、あと一点見つけるのが難しかった。長所を三つ以上言えるためには一人一人をよく観察する必要がある。人は短所にはすぐ気付くが長所には気付きにくい。校長から「教師は、発想を転換することも大事である。」とアドバイスをいただいた。発想を転換して考えてみると、短所もまた長所

になると気付くことができ(リフレミング)、担任している三十九人全員の長所を三つ以上言えることができた。

このことは、自分が担当している集団一人一人の長所を三つ以上見付けることができたなら、その集団は掌握できたことになるという校長の指導であった。

以来私は、このことを常に念頭において実践している。この結果、今まで自分が担当してきた集団について様々なことに気付くことができるようになり、その結果いろいろな事が好転するようになった。人間の本質は「褒められたい、認められたい」という承認欲求であると考ええる。管理職として勤務している現在、職員の間を三つ以上見付けるように心がけている。そのことを、職員個々に伝えるようにしている。その結果、職員も自分が担当している子どもたちの長所を、一つでも多く見付けようとする雰囲気醸成されている。このことが相互に一人一人を大切にしようとするにつながり、それがひいては、一人一人の集団に対する帰属意識の高まりにつながり、その集団の結束力は強まると考える。

今後もこのことをいろいろな場面で、実践していきたい。

## 「ぼくがありがとうと言う日」

照島小(日) 町田実徳

私が再配一年目に担任した五年生の学級は、男子が多くやんちゃではあるが、仲が良く元気な学級だった。Kはその中心でみんなに慕われていた。Kはソフトボール少年団のエースだったが、三年生もレギュラーというチームで、良いピッチングをしても負けてばかりだった。それでも、Kはいつも僕が打たれるから悪いんだと言ひ、決して仲間を責めなかった。

そんなKのある日の日記に、「明日はぼくのたん生日です。きよ年のたん生日はお母さんがわすれていて、プレゼントも何もありませんでした。とても悲しかったです。だから、明日はとても楽しみです。」と書いてあった。「今日は楽しみだね。」と帰る時には声をかけた。

翌日の日記にはこう書かれていた。「今日はぼくのたん生日でした。きよ年のたん生日にお母さんが忘れていて、プレゼントも何もなかった。今年はどうなことをしてくれるか、とても楽しみでした。でも、今年もお母さんがわすれていて何もありませんでした。悲しかったです。」どれほどショックだっただろうか、K

の泣き顔が目には浮かんだ。

しかし、日記はこれで終わりではなかった。Kはこう続けていた。「でも、いいんです。今日はお母さんがぼくを産んでくれた日。だからぼくがお母さんにありがとうと言う日だから・・・。」そこから先は、文字が滲んで読むことができなかつた。

Kはその後、高校球児として甲子園で代打の切り札・チームのムードメーカーとして活躍して注目を集めたが、甲子園で躍動する姿、チームメイトに囲まれ笑顔を見せる姿に小学生時代と変わらないKの心を見た気がした。

私の勤務する照島小は児童数一八四人で不登校児童が一人もいない。これは教頭を中心に職員がきめ細やかな配慮をし、保護者も児童も頑張ってくれてお陰である。地域の方々も様々な面で支えてくださっている。私はそんな周りの方々や子どもたちに感謝しながら、一日一日を大切に過ごしていきたい。

## 勉強ができなくてかまいません

西俣小(隅大) 松 元 優 彦

鹿児島市内で五年生を受け持っていた頃の話である。私は三十代前半。良くも悪くも肩に力

が入っていた時期だった。我が子もまだ幼くて、小学生の子どもの持つ親の気持ちを心の底からは分かっていなかった。それでも偉そうに教育や家庭教育を語っていたと思う。

家庭訪問。K君の母親が話の半ばで「うちの子は勉強ができなくてかまいません。母子家庭で兄弟も多く、私も毎日朝から晩まで働いているので子どもの勉強を見るのも無理です。」と言われたのである。

確かにK君は勉強がふるう子ではなかった。個別指導をしても、次の日はすっかり忘れていて、家庭学習もままならず、運動も図工も音楽も目立たない。得意なことも特にならない。また、ボスのな子でもなく、悪ぶるでもない。みんなを笑わせるわけでもなく、特記事項もなしという子だった。母親は続けて言った。「学校は勉強が第一で、授業参観でも学級PTAでも、家庭訪問でもそのことはかりで私はいつも小さくなっていました。責められているような気がしました。だから学校から足も遠のきました。うちの子は勉強も運動もできなくて宿題も忘れるかもしれない。でも、私がいけないときは進んで家事をしてくれます。私のことも気遣ってくれます。うちの子は悪い子なのですか。私は友達を大切にできる人に育ってくれればいいと思っています。」と。

思い返してみると、K君は「不機嫌な顔をせ

ず」「嫌なこともしない、言わない」子で「誰でも分け隔て無く誘い」「何事に対しても素直」で「劣等感もなく」「分らないことがあったら気軽に尋ねる」子だった。彼の周りにはいつも友達がいって笑い声に包まれていた。K君は「いい子」だった。そして彼も学校は楽しいと言ってくれていた。

学校経営をする立場になった今もこの一言は心に在り、K君とK君の母親が満足できる学校でありたいと常に考えている。

## 「初心忘るべからず」

亀徳小(大) 越 間 むつみ

採用六年目となり仕事にも慣れ、いろいろと係も任されるようになった頃である。尊敬する先輩と同学年を組ませていただいた。三十数年経験を重ねてもなお、何事に対しても心を込めて丁寧に仕事をされる主任の姿を近くで見せていただき、これが「初心忘るべからず」ということなんだと思ひ感動したことを覚えている。そして、先輩のように何事においても、教員を始めた頃の謙虚で真剣な気持ちをもち続けていかなければと思つた。

その後、これが世阿弥の晩年の著書『花鏡』

にある言葉で、本来は「物事を始めた頃の未熟で失敗ばかりであったときの記憶や、その時に味わった屈辱や悔しさ、そこを切りぬけるために要した様々な努力などを忘れてはならない」という意味であることを知った。

どちらの解釈も私にとっては、気持ちを新たにやる気を出せる言葉として捉えることができ、折々に思い出し、自らの中弛みや慣れにより生まれる慢心を戒める言葉となっている。

振り返ると多くの節目があり、様々な経験と共に失敗と成功を繰り返して今日に至っている。教員採用試験が間近に迫り緊張と不安で涙を流しながら勉強をした日の気持ち、初めて教壇に立った日のこと、授業やコミュニケーションづくりで悩んだこと、教頭として新しい気持ちで出勤した日のことや失敗・悩み・感謝の数々、そして校長一年生となった今…。

これまで多少の努力はしてきたつもりだが、常に同僚や保護者、地域の方々、家族に支えられ何とかやってこられたのも事実だ。これからも、「初心」を忘れず、支えてくださる周りの方々への感謝の気持ちを忘れず学校経営に当たりたい。年を重ねても、夢をもち、「昨日より今日、今日より明日」と、初心をどんどん更新しながら、より意義ある人生を生きたいと思う。

## ある日の校長講話



### オリンピックと終戦記念日

油久小(熊) 田向 恵 郎

今年の夏は、皆さんもオリンピックを見ていることと思います。オリンピックのマークを知っていますか。五つの輪が重なったマークですね。この五つの丸は、世界の五つの大陸を表し、世界が団結した大会となるようにという意味があるそうです。つまり、スポーツを通して、世界の国々が仲良くなり、世界平和の実現を表していると言われています。

さて、八月十五日は終戦記念日です。この日は、戦争で亡くなった方々を悲しみ、平和を祈る日です。今年で、戦争が終わり、七十六年目になります。この戦争では、多くの人が死んだり、町が爆弾で焼かれました。小学生も、

学童疎開といって、両親から離れて遠くの田舎で生活をするということがありました。中種子町の子どもたちは、現在のさつま町というところに疎開したそうです。また、広島と長崎に原子爆弾という恐ろしい爆弾が落とされ、一瞬で多くの人が亡くなり、多くの建物が壊されました。

国語の教科書にも戦争の頃の物語があります。三年生の「ちいちゃんのかげおくり」、四年生の「一つの花」です。これらの学習にも、戦争の悲劇を二度と繰り返さないという思いが込められています。

それでは、私たちは何をしたらいいのでしょうか。まずは、人を尊重する(大事にする)心を持つことです。これまでのように身近な人に、そして、皆さんがこれから出会う多くの人に対しても同じです。人と人が尊重し合うことで、国と国が尊重し合い、戦争のない世界平和につながっていきます。

これから、平和について考えながら、オリンピックを見てください。そして、終戦記念日を迎えてください。



## ストレスで素材を生かす

桜丘中(市) 上久保 大 介

皆さん、「○○の秋」と言ったら何と答えですか。(中略) 大学生にアンケートをとると一番多いのは「食欲の秋」だそうです。そこで、今日は食べ物に関する話をします。あなたの一番好きな食べ物は何ですか。大きな声で一斉にどうぞ。(中略) いいですねえ。今、君たちが答えた食べ物は全て調理されていますね。まさか魚が好きだからって生きてる魚にかぶりつく人はいないし、肉が好きだからって牛に噛みつく人はいません。食材は必ず切ったり、擦ったり、煮たり、焼いたりします。そうすることに、食材の味は変化します。例えば大根は煮ると甘くなり、擦ると辛くなります。つまり、食材はストレスを与えることにより味が変化するので、その変化した味にさらに工夫を加えて、おいしくしていくのが料理です。また、他の食材とかけ合わせると、それぞれのうま味がお互いを高め合いさらにおいしくなります。私は単身赴任中、毎晩、料理を作っていました。料理は下手ですが、時々奇跡的に一流レストランのようなおいしい料理になることがあります。

た。しかし、逆にとてもまずい料理になることもありました。料理の仕方により、その食材は生かされたり、台無しになったりするので、君たちもこれと同じです。君たちは、いい素材をたくさん持っています。それらは、ストレスを加えることによりおいしくなるはずですが、

しかし、ストレスは、強すぎても弱すぎてもいけません。例えば、焼き魚の火の通りが不十分だと、生臭くて食べられたものじゃありません。逆に火が強すぎると焦げて炭になってしまい、適度なストレスが、その素材のよさを生かしていくのです。また、他の食材をかけ合わせるように、友達と一緒に活動することにより、君たちの能力はさらに高まっていきます。勉強が嫌だったり、友達とのいさかきがあったりします。しかし、そのようなストレスを乗り越えることにより、人生は深みを増し豊かになっていきます。

君たちは今が旬です。旬な素材は旬な時に料理するのが一番です。昔、取り立ての椎茸をもらい、その日のうちにシンプルにガスレンジで焼いて食べたことがありました。それは人生の中で一番おいしい椎茸でした。しかし、次の日おいしさは半減していました。食材には旬があるんです。もちろん、二、三年経ってからおいしくなる熟成という調理法もあります。ただし、それも旬の時に仕込みをしておくことが必要で

す。これからの君たちの人生は長いです。その人生を楽しく、豊かにするためには、旬である今、仕込みをして、適度なストレスを経験して、克服していくことが大切です。それを助けてくれるのが、親であり、先生であり、友達であり、君たち自身です。前向きに希望をもって、これからも頑張っていきましょう。今日の話はこれで終わります。

## 「学校のルーツを探す」

川辺高 前 田 裕 一

今週末、創立百二十周年記念式典が行われます。川辺高校の前進である県立川辺中学校は、明治三十三年に鹿児島尋常中学校(のちの鹿児島県第一中学校、現鶴丸高校)の分校(鹿児島県第四中学校)として開校されました。今日は、この学校設立に携わった二人の方の話をします。第四中学校の初代校長は岩崎行親先生です。先生は、当時鹿児島尋常中学校の校長であり、川内中、加治木中の校長も兼任され、同時期に四校の校長を務めていました。岩崎先生は、鹿

児島県知事であった加納久宜公に懇願され鹿児島に來られた方で、現在の香川県の出身です。

東京英語学校で学び、札幌農学校（現北海道大学）の二期生としてクラーク博士の教えを受け、「国家にとって有用な人物。また、自分の身を顧みないで、国事に尽くす人」と言われるような教育者でした。当時の鹿児島は混乱状態であり、明治二十七年四月に鹿児島尋常中学校の教諭として着任し、同年十二月には校長になりました。鹿児島第二、第三、第四中学校などの旧制中学校の開校事業に取り組み、自ら校長を兼任しながら各校を開校・運営していきました。

貧しかった鹿児島を加納公は殖産興業と共に「教育こそ、人の基礎を成すもの。このままでは、我が県の子どもたちが不幸になってしまふ。きつかけは何であれ、貧しい者でも、平等に教育を受ける機会を与えることで、人として大きな財産を得ることになり、人こそ国を支える基盤である」という信念を持ち行動する人でした。岩崎先生は、加納公と共に、教育改革を強い意志で実行しました。

川辺高校は、この思いを具現化する旧制川辺中の伝統を引き継いでいます。これまで輩出された先輩方は、世界各地、様々な分野で活躍しています。「神戈陵魂」は、この川辺高校で学んだという誇りを胸に、地域に有用な人になると努力することです。ぜひ、皆さんも、こうあってほしいと思います。



## 離島の想い出

西浦小(始)

浜田勝也

平成二年、初任校の鹿屋小を後にし、家族三人で西市立安納小学

校に着任した。高速船トッピーにワクワクして乗り込んだ日がつい昨日のようだ。一年目から校長・教頭先生の住宅で情報交換の日々。種子島弁が全く分からず苦労もした。二年目に長女誕生。地域の方とは種子島弁で普通に会話する毎日。三年目の前半は長期研修。後半は長男・長女が肺炎で入院を繰り返して、きつかった。どうにか乗り越えられたのは看病に明け暮れた妻のお陰。四年目の夏、初めての手術入院。五年目に複式、六年目に教務主任を経験し、その後の土台になったと思う。

平成十一年。知名町立下平川小学校に着任した。家族四人で沖永良部空港に着いたあの日が鮮やかに蘇ってくる。当時、お仕えした校長先生から「子ども、保護者、地域に惚れよ。それ

ができない時は、学校を去れ。」と厳しい指導も受けた。初めての教頭職。なりふり構わず働いた。懇親会では踊りも踊った。我が家での情報交換も楽しかった。ここでも、妻の世話になった。段取りから後片付けまで。感謝の一言しかない。あつという間の三年間。「沖永良部を離れたくない。」と駄々をこねた我が子の気持ち

が痛いほど分かった。

平成二十三年。十島村立宝島小中学校へ妻と二人で着任した。真夜中発のフェリーとしまは、明け方から各島に寄って進む。船からの眺めは絶景の一言。着任した一年目。六年女児一人に卒業証書を手渡した。私は四年間、宝島に籍を置いた。すると、嬉しいことに、着任した一年目に卒業証書を手渡した女兒に三年後、中学校の卒業証書を手渡すことができた。義務教育九年度の重みを感じる貴重な経験だった。この生徒が私に話した別れの言葉は「私は三年間かけて進学する高校の生徒になります。」だった。

学校に籍を置いて三十六年になろうとしているが、「私は本当の教師になれたのか。」堂々めぐりの自問自答が続くが、人の評価は他人がすること。三月末、今回は一人で西浦の校長住宅から持ち家へ引越すことになる。一息ついた頃、先ほどの答えが届くかもしれない。

## 雪に思うこと

切通小(北)

仲村 智博

冬を迎えると毎年必ず思い出す。父親の転勤に伴い北海道で過ごした高学年時のことである。

冬の経験は驚くことばかりであった。学校のことではまず、給食のカレーである。お椀の中には大きなホタテがその形のまま、まるごと入っていて汁の方が少なかった。また、人気メニューは「いかめし」。手作り感たっぷりでも美味しかった。生活目標は、「軒下を歩かない」だった。何日も降り続いた雪が屋根に積もり、ある時、耐え切れずものすごい勢いで音を立て滑り落ちる。中には大きなやりのような氷柱が付いている時もあり、雪の恐ろしさを知った。また、特に思い出すことが二つある。

一年目、住んでいた官舎の前に積もった背の高さほどの雪を利用して横穴を掘り、その中でラーメンを食べていた。そこへ、今まで聞いたことのない「サクサクサクサク」といった音が近づいてきた。直感で雪穴から脱出したところ、なんと、目の前に大きな雪かき車がいた。間一髪であり、その掘った雪穴の辺りは道路であった。「自分の命は自分で守る」を身をもって感じた出来事であり、今思い出しても寒気がする。二つ目は吹雪が強くなると全校で早退とな

り、体育館に集合し班ごとに集団下校になることだった。私がいた官舎は学校から一番遠く、班のほとんどの子どもは、九州や四国等からの異動で雪国の経験はなかった。二年目は六年生となり班長となった。その当時、先生方は集団下校を見送るだけであった。出発してからしばらくすると、顔や手、足底は凍り付くように冷たくなった。列の真中に挟んだ一年生の歩く様子を見ながら、先頭の同級生に歩く速さを指示した。途中、吹雪が強くなり班全員で避ける場所を見つけた。吹雪が弱まるまで待つことにするか。しかし、体力は消耗していく。その場の状況により判断をどうするか、最後は班長の決断であった。無事に官舎へたどり着いた時の安堵と脱力感を今でも覚えている。

体育館の窓から吹雪を眺めていた時の「不安と緊張感。」「みんなを無事に連れて帰る。」班長としての責務は、今でも忘れることはない。

## 「教師力」を考える

伊集院小(日)

宮脇 一郎

令和元年十二月、中教審初等中等教育分科会により「新しい時代の学校教育の姿」が示された。

「多様な子どもたちを誰一人取り残すことのない、個別最適化された学びの実現」「全国津々浦々の学校において質の高い教育活動を実現可能とする環境の整備」このような学びの現に向けて始まったGIGAスクール構想やコロナ禍により、学校現場でのICT環境の整備が加速度的に進んできているように思われる。電子黒板や子ども一人一人に提供されたタブレット端末により、学習指導の形態も新たなものになりつつある。物的な教育インフラの整備が進むことにより、多様な子どもたち一人一人の能力や適性に応じた学びが提供されることになる。

本校の教職員も様々な研修の機会を利用し、オンラインでの会議を積極的に進めたり、ICT機器を活用した効果的な授業についての研修に熱心に取り組んだりしている。

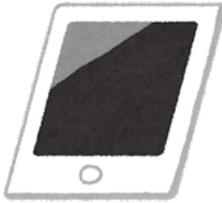
物的な教育インフラ整備が進む中で、考えさせられる事件が起こった。東京都町田市の公立小学校で起こったいじめ事案である。小学六年生の女兒が自らの命を絶つという痛ましい事件である。しかも、学校から配布されたタブレット



ト端末が使用されたいじめであった。

このような時期だからこそ、私たち現場の教師は、教育インフラの基盤としての人的な教育インフラの整備を重視していく必要がある。人的教育インフラとは、教師一人一人の資質・能力のことであると考ええる。「教育は人なり」という言葉もある。教職に対する熱い情熱や教育の専門家としての確かな力量が求められていると考える。町田市の事案は、単に情報モラルの指導の課題ばかりではない。

学びを指導する教師の基本姿勢や資質・能力をいかに高めていくかが最も重要な課題である。指導力のない教師、人間として尊敬できない教師に出会ってしまえば、どんなに物的インフラが整っていても、学びが成立できるとは考えられない。「いじめ」を許さない雰囲気浸透する学級・学校づくりなど当たり前のことを当たり前に指導できる「教師力」に今一度目を向けた学校経営に努めたい。



## 読書案内



■西村貴好 著

### リーダー必読! 「ほめ達」の極意 やる気を引き出す「心の報酬」

宇宿小(市) 鎌田卓生

著者は、一般社団法人ほめる達人協会理事長、ほめる調査会社シーズの代表取締役である。ほめる仕組みで人と組織を活性化させるために、橋下徹元知事が大阪府の調査を二年連続で依頼したり、採用企業の業績アップにつなげたりと企業再建のエキスパートでもある。また、NTTグループ・スカイマーク(株)などの大手企業が西村氏の講演やセミナーを取り入れている。学校現場でもほめることがやる気につながり、組織の活性化が図られることは、企業と共通するところであろう。本書は、

- 一 なぜ「心の報酬」が必要なのか
- 二 部下が変わった、チームが変わった!

- 三 リーダーの心が整い、相手も伸びる
- 四 今すぐ渡せる「心の報酬」②④
- 五 効果を高める①の強化策
- 六 結果を出すチームビルディング
- 七 「チームの若手」のやる気の高め方
- 八 心のしなやかなリーダーになるために

の八章で構成されており、「なるほど」と共感できるものが多く、リーダーに必要な資質と能力を示唆してくれる一冊である。内容を少し紹介すると、相手の「心」を満たす「心の報酬」には、「成長の実感」と「貢献の実感」の二種類があり、今の若者には、成長実感の演出と自分たちの仕事は社会に立つ仕事であると理解させることがリーダーの重要な仕事になってきているとある。そして、この二つの「心の報酬」よりもっと価値の高い報酬が「ねぎらい」であり、やって当たり前のことに対する、気付きや共感、感謝を伝えることなので、いつでも相手に伝えることができるものがある。また、「心の報酬」の効果は時間をかけて現れるものがほとんどであるが、最後には、部下に与えた分だけ必ず自分自身の心に戻ってくるという特徴がある。

コロナ禍の今こそ、この「心の報酬」の渡し方を習得し、やりがいのある元気な学校を創りたいものである。

PHP研究所 一六〇〇円

## 奇跡のバックホーム

川内小(北) 林 耕 二

二〇一九年九月、二十四歳のプロ野球選手が現役を引退した。阪神タイガース横田慎太郎選手だ。鹿児島実業高校で一年生から四番を任せられ、ドラフト二位で阪神に入団した。高校時代に甲子園出場はなかったが、そのプレー見たさに当時の鴨池球場に何度か試合を見に行ったこともある。全力疾走で守備位置に向かう姿は魅力的だった。

プロ三年目に二番センターで開幕出場し、更なる飛躍を目指した四年目の春、脳腫瘍が見つかった。二度の大手術を乗り越え、再起を目指して努力を続けたが、目の状態が回復せず、惜しまれつつ引退を決意した。

そんな彼が自身の野球人生を振り返った著書が『奇跡のバックホーム』である。背番号一二四で千日ぶりの公式戦出場となった二軍の引退試合(二軍の選手が引退試合をしてもらうこと自体が奇跡)で、センターからのバックホームで二塁ランナーを本塁アウトにしたのだ。飛んでくるボールがほとんど見えていなかったこと、何かに後押しされたように身体が反応したこと、練習でも経験のないほどのノーバンド送球ができたことなど、著書の中で「神様が導いてくれた奇跡」と記している。「野球の神様っ

て本当にいるんだな。」と思ったそうだ。

私も子どもたちに神様の話をすることがある。努力を続けていたら「〇〇の神様」が見えてくれるという話だ。横田選手も復帰を目指して懸命に努力を続けたからこそ、最後の最後に「野球の神様」が助けてくれたのだろう。著書の最後に「どんなに辛いこと、苦しいことがあっても、例え小さな目標でもいいから、それを見失わず、頑張ってほしい。」とある。この実直で努力家の「私の中のヒーロー」に、ぜひ本校で子どもたちに夢をもつことの大切さ、努力することの素晴らしさを伝えてほしいと考えている。

幻冬舎 一四〇〇円

## ■汐見稔幸 著

### 教えから学びへ

西指宿中(南) 脇 田 武 志

著者の専門は、幼児・児童教育学、保育学、教育学。東京大学名誉教授。白梅学園大学名誉学長。他著書に『本当は怖い小学一年生』『天才』は学校で育たない(いずれもポプラ新書)などがある。保育・教育関係者が学びあえる公共の場づくりにも力を入れている方である。「教えから学びへ」教育にとって一番大切なこと」は、人に必要な学びと、それを促す教育

とは、本来どういうものであるべきか。今の時代と学びがそれと乖離しているのはどういう経緯からなのか、一つ一つ紐解いてくれる良書。学びとは、言葉で把握した特性や法則に自分なりの意味を重ねて理解し、さらにそれを実生活で使えるスキルを身に付けること。そのために行ける教育とは、子どもが興味をもったことに熱中できる場を用意すること(興味をもてる環境を含む)であると述べている。改めて自分の中で「学び」について整理することができた本であった。

①どうして生きているのかな? ↓生きていくっていいなあと感じること。この感覚こそが幸せであり喜び。②知識は、調べれば何でも分かる時代。↓教師は知識を教えるのではなく子どもの学びをどう育てるか。一緒に考える。共感と共創。③大人は自分たちよりも下の世代、子どもから学ぶ。新たな感覚を取り入れていく。正解のない時代は、古い枠組、経験値では解は見つからない。等、様々な示唆を含んでいる。

また、同時期に読んだ本「読書からはじまる」(長田弘著・ちくま文庫)では、「子どもがどんなに少なくなっていく社会では、他人に勝つために勉強する必要より、もっとずっと必要なのは自分を確かにするためにする勉強であり、自分を確かめる方法としての勉強がいつそう求められます。」という文もあり、学びについて考えさせられる内容があり、併せて読むとおもしろい本であった。

河出書房新社 八九〇円

今から三十数年前に大学を卒業して、小中併設校に期限付教諭として勤務した。職員朝会や職員会議は小中合同で実施するが、職員研修は小中別々で行う。当時は、小学校が県の指定を受けて学校給食の研修を進めていた時のことである。

公開は二年間だが、指導案の形式、授業者は誰にするのか。研修を数回重ねていく中でようやく決まった。後は当日までの準備を進めていくと、授業者であるT先生の教室は、子どもたちが勉強したい環境になっていった。教務主任として全体をまとめる立場であつたが、子どもたちが生き生きと授業に取り組んでいる姿に感動させられた。

T先生は、教材はほとんど手作りである。いつの間にか教具ができていた。算数の授業の準備をしていると、教室にやってきて、「この教具は、算数でも使えるので、自分が作ったものを使ってごらん。」と教室に置いていかれた。まさに手作りであつた。子どもたちには、T先生にお借りしたので、「今日の授業に使わせていただいたものだから。」と伝えると子どもたちは「T先生は、何でも手作りで、作るのがとても上手だよ。」と話してくれた。買うとお金もかかり、学校に教具もなかった。T先生が何か作る時には、いっしょに教具を作ろうと心に決めた。

授業の教具以外でも、給食着を入れる箱を作ろうと考えていたので、助手として手伝いすることにした。学校に板がないので、市内まで板

を買うことから始めた。作っていくうちに、時間も忘れて夕食時まで学校に残ったこともあつた。結局六学級分まで給食箱を二人で作ることになった。試作を一つ作り、残りを作り終えるのに、一週間かかった。大工の見習いのようにだったが、作り終えた時のすがすがしさは、今でもはつきり覚えていいる。

期限付をしている中で、T先生との出会いがなかったら教具を作ったり、こわれたものを直したりしなかつたと思う。次の年に小学校の教員として採用されたが、T先生といっしょに教具を作った経験が生かされた。予算が少ない時に、教具を手作りすると子どもたちも楽しみに授業を受けていた。

管理職になった今でも、子どもたちが使う教具や職員から作ってほしい教具の願いがあるが、頼まれたらすぐに取りかかるとしている。昨年は、台風で学校の百葉箱が壊れて、使えできない状態であつた。材料費をいただいで作り直した。ペンキを塗って元の形にした時には、子どもたちがうれしそうに校長室まできてくれた。修理できてよかったと内心ほっとした。飼育小屋（鴨）も老化して壊れかけていたため、新しく作り替えた。学校で飼っている鴨の小屋だから心配したと思う。毎日出来ていく

## 趣味・文芸

### 「きっかけは物作りから」

小浜小(始)

久永公人

のを楽しみにしていたと思う。動物がけがをしたらいけないので、丈夫でしっかりした小屋にするようにした。

ある日、地域の方が、学校に見えて、「小浜小学校の支柱がこわれているので、なんとかしないと台風で流されてしまう。PTAと相談して作り直した方がいい。」といわれた。板がないか学校内を見て回ったが、なかったので角材を買ってきて、支柱を作った。ペンキを塗って仕上げたが、学校入口がはつきりわかるので、安心したということだった。地域の方々は、直っていたので、安心してと思う。

期限付教諭で出会った授業のための教材作りであつたが、今では、趣味として、役立っている。大工道具も少しずつそろえていいる。

児童や職員が困って相談にくる時には、私の大好きな大工を発揮することができる。児童が喜んでくれると、作る側としてもきちんとしたものを作らないといけないという気持ちになってくる。あと数か月で退職になるが、小浜小学校に勤務できた喜びをかみしめながら、自分のできることは、何かを考えて、毎日を通していっている。いつも地域の方や学校の職員に支えられているということ、児童が安心して登校できるのは見守り隊の方の協力があつたことだと思う。最後まで感謝の気持ちを忘れないように健康でいこうと思う。



## 「学校と郷土教育」

### ～細山田校区の紹介～

細山田中(隅) 野 邊 盛 雅

#### 一 はじめに

今年度の体育祭は、約七十年の伝統を誇る「細中音頭」を披露することができた。先輩から後輩へ連綿と受け継がれた本校独自の音頭で、全校生徒百十六人が輪になって踊る姿はどこか勇壮だ。この音頭は、細山田校区に伝わる「細山田音頭」と「棒踊り」に着想して作られたものと考えられ、本校先輩諸氏の校区へ寄せる郷土愛を感じられる。

#### 二 校区の概要

細山田校区は、旧串良町の西方、笠之原シラス台地を母体とした串良台地上に位置する。

平成十八年の合併により鹿屋市の郊外地となり、現在は自治体数三十八団体、約四千人で構成されている。畑作灌漑事業の下で主に甘藷栽培や畜産業が営まれてきたが、交通路の要衝としても発展し、校区の中央部をほぼ東西に国道二六九号線が横断する。

また、昨年七月には東九州自動車道の細山田ICから志布志・鹿屋間が開通し、交通網の利便性が高まることで、ベッドタウンと

#### 三 校区の地理と歴史

しての新たな期待が高まりつつある。本校区は、主に標高約百m前後の平坦な台地上に広がり、西に高隈山地、南東に内之浦の山並みを眺望できる景観の優れた場所にある。

しかし、近代以前においては、「水の無い不毛の地」として、水資源の確保に長く苦悩した歴史があり、深さ約七十mにもなる県指定史跡の「土持堀の深井戸」は、それをよく物語っている。大正時代以降は、徐々に上水道施設が整備され、昭和二十年代後半には、高隈川上流ダムからの用水導管によるパイプライン事業が進み、主に畑作、畜産、養殖業等の農業経営に大きな進歩が見られた。

一方、高台地形の特色として、旧石器時代から近世にかけての幅広い時代の遺跡が豊富な地であり、牧山遺跡では旧石器時代の痕跡が見つかっている。その他の遺跡でも弥生から古墳時代にかけての多くの墓坑や青銅製の遺物が確認され、かなりの勢力を持つムラの存在を窺わせる。中世においては、校区の台地北東縁辺部を流れる串良川流域沿いに、「細山田城」や「北原城」等の中世山城が並び、有力豪族の拠点地として大隅地域における政治経済の要所であったと考えられる。近世以降は、灌漑施設の開発に伴い、活動拠点が台地上へと移った。

また、昭和初期に特攻隊基地としても利用された「串良海軍航空隊基地跡」が串良平和公園に戦跡として残り、あらゆる時代の史跡に恵まれた校区である。

#### 四 学校と郷土教育

「細中音頭」については冒頭で触れたが、これとは別に「総合的な学習の時間」を活用して、校区内の生栗須集落に伝わる「生栗須棒踊り」を先輩から後輩へ伝え、伝統芸能の継承に貢献している。

また、例年、一年生は埋蔵文化財センター職員を講師に招き、郷土教育の一環として、校区の古代史を学習している。特に今年度は、各時代のテーマごとのグループに分かれ、文化祭の創作劇中での成果を発表した。

二年生は、串良海軍航空基地跡を中心に戦争と平和についての平和学習を継続している。これは、細山田小学校と連携した小中一貫教育としての性格を併せ持つ特色ある教育活動でもある。

そのほか、PTA活動と連携したサツマイモ栽培体験を実施している。学校に隣接した県農業開発総合センターの畑地を借りて長く続けている取組で、地域の基幹産業である農家の後継者育成に繋がる校区の特色を生かした活動になっている。

このように、学校教育においても、歴史のタテ軸と地域産業のヨコ軸を交差させる視点で郷土教育を推進している。

#### 五 おわりに

令和二年度に、各自自治体の代表で構成される「細山田コミュニティ協議会」が設立され、校区の活性化へ向けた気運も盛り上がりを見せている。今後は、交通網整備に伴う人口増加も期待され、人的パワーが高まる可能性を多分に秘めている。これからも校区の発展を学校教育の側面からも支えていきたい。

# 専門部だより

## 〈総務部〉

### 一 教育機関・関係団体との連携

県教育委員会をはじめ県PTA連合会、県教頭会との連絡会等を可能な限り実施し、情報交換や連携に努めた。

今年度も新型コロナウイルスの感染状況に鑑み、県教委への予算要望等の検討、役員会の運営など会場や人数制限等を工夫しながら実施した。また、県教育委員会との懇談会は中止し、県退職校長会や県教頭会との会合も見送ることになった。

県PTA連合会との連絡会では、学校での新型コロナウイルスへの感染防止拡大防止に係る対応について多くの質問があり、学校やPTAの現状や防止策等について意見交換がなされた。困難な状況の中でも、工夫しながら本来の教育活動を行っていきたいという学校の意見に対して、保護者から協力を惜しまないという意見が聞かれた。関連して、保護者との連絡体制や広報の仕方が取り上げられた。連絡等に関してメール配信での有効性や利便性が話題となり、ホームページを活用した発信にも期待が寄せられた。

### 二 学校予算に関する要望活動

県内各校長会の意見・要望をまとめた要望書を作成し、十一月十五日、県教育委員会に対して学校予算に関する要望を行った。これまで継続して要望を行ってきた教職員の配置改善については、専門性のある人材の配置や、学校組織の機能化と働き方改革を推進するミドルリーダーとしての主幹教諭の設置などを要望した。

旅費や施設・設備については、新型コロナウイルスの影響を配慮した弾力的な運用や予算確保をお願いした。

県教育委員会からは、特別支援学級の増設

に伴う教職員の確保や国の動向、今日的課題の解決を踏まえた教員配置に努めていくことや、感染症対策に関連した交付税の適切な活用について、市町村教育委員会に周知する旨の回答をいただいた。

### 三 各地区校長会との連携

例年、夏季を中心として各地区の校長会と連絡会を開催してきたが、県内の感染状況が広がりをみせる中で、開催を縮小せざるを得なくなった。本年度は、鹿児島市、北薩、始良・伊佐地区の三地区と会合を開いた。やはり、新型コロナウイルスの影響下での教育活動の在り方が話題の中心になり、情報の共有や学校間の連携の重要性について意見交換を行った。

### 四 その他の各種会合との開催

計画に従い開催を準備したが、年度前半は総会や常任委員会をはじめ多くの会合が紙上によるものとなった。十月以降は会合の会場を変更したり、参加人数を制限したりして、必要に応じて開催した。

## 〈研究部〉

### 一 鹿児島県小・中学校長研究大会

今年度の大会は、最初から新型コロナウイルス感染症の影響を想定し、少しでも実施の可能性が広がるようにと、分科会会場には、通常の二倍の広さとなる部屋を確保するとともに、どうしても密になることが予想される全体会については、事前収録した映像を各分科会会場で視聴する形での一日開催を予定し、準備を進めていた。

しかし、その後、本県においても、まん延防止等重点措置が適用され、さらには会場として抑えていたホテルまでもが使用できない状況となったことから、昨年度に引き続き、人を集めての開催を断念することとなった。

一方、事前収録した映像の視聴を予定していた東條広光県教育長の講話及びサンマリノ

共和国大使館特別顧問の藤山邦子氏の講演（演題：「学びの本質とは？ 生きるとは？」）については、紙上開催決定後も収録作業を続け、期間を定めユーチューブで配信することができた。

分科会で発表いただく予定だった方々には紙上発表となり、大変申し訳なく思うが、紙面を通じて、多くの実践に触れることができた。

### 二 全国・九州の研究大会

全国的な感染拡大を受け、令和三年度の全国・九州の研究大会は、全て紙上またはオンライン開催となった。

- 第七十三回 全連小「石川大会」
- 桜丘東小 脇坂 郁文（第一分科会）
- 第七十二回 全日中「静岡大会」
- 谷山中 草野 芳人（第三分科会）
- 第七十三回 九小協「福岡大会」
- 伊集院小 宮脇 憲一（第一分科会）
- 串良小 福留 憲一（第四分科会）
- 伊仙小 古田 良成（第六分科会）
- 第七十二回 全九中「沖縄大会」
- 大口中央中 東 正昭（第二分科会）
- 枕崎別府中 竹下 誠（第三分科会）

敬称略

全国・九州の研究大会並びに県校長研究大会のために原稿をお寄せいただいた小学校二十名、中学校十三名の校長先生方にこの場を借りてお礼申し上げます。

## 〈人事給与部〉

### 一 人事・給与及び人事評価制度に関する調査

「令和三年度の人事・給与に関する意見」と「令和四年度への要望」一教職員の人事評価制度に関する意見・要望」について、全校長にアンケート調査を実施し、その結果をもと

に、県教育委員会への要望書を作成した。

## 二 県教育委員会への要望活動

「県教育委員会への意見・要望の会」(参加者・県教育委員会(教育長他九名)、県連合校長協会(会長他六名))を、十月十九日に、県庁で実施し、次の点を主に要望した。

- (一) 人事異動について
    - (ア) 校長が、より主体的に学校経営を推進できるように、人事異動に関する校長の具申を十分に尊重する。
    - (イ) 教員交流研修など、多様な交流をより積極的に推進する。
    - (ウ) スクールサポートスタッフ等の業務改善に係る人的配置に努める。
    - (エ) 臨時的任用教員が未配置とならないように努める。
  - (二) 給与や人事評価制度について
    - (ア) 教職に魅力を感じられるよう教員の給与の維持・改善に努める。
    - (イ) 管理職の給与や手当等については、職責に見合う処遇の改善を図る。
- 県教育委員会からは、教職員の人事評価の処遇への反映については、校長の評価も踏まえて適正に行うとの回答を受けた。

## 〈広報部〉

令和三年度も会員の皆様の御協力により、当初の計画に基づいた活動が円滑に進められたことに感謝いたします。

## 一 月刊「鹿児島島の教育」

「随想」は、県下各地において様々な分野で活躍しておられる方々に玉稿をいただくことができた。特に教育以外の分野からのお考えや思いに触れさせていただいたことは有意義であった。また、会員の提言や実践事例、各種話題等はそれぞれ特色があつて学校経営に生かせる内容になっており、研修資料としても今後活用できるものであった。

## 二 特集号「鹿児島島の教育」第六十七号

特別寄稿には、志學館大学教授の原口泉氏より、鹿児島島の偉人である五代友厚が生涯もち続けた熱き思いを伝えていただき、郷土鹿児島について深く学ぶ機会を得ることができた。サイバー大学IT総合科学部教授の勝真一郎氏には、これからの変化の激しい時代の中で、「構造化思考」と「アート思考」の両方の視点で考えることの重要性を基に、未来を担う鹿児島の子どものための教育の在り方に示唆をいただいた。

## 三 「師の道」四十九号

先輩校長の歩いてこられた教職への熱い思いに、ただただ感動するばかりで、心から敬意を表する次第である。

## 四 「講演録」発行

十二月に実施されたJAXA鹿児島宇宙センター所長の川上道夫生氏の講演を講演録として、発行することができた。

## 一 一般財団法人校長会館だより

### 校長異動

○新任 令和三年九月十四日付

肝付町立波野中学校長

山田 貴志 氏

(前鹿児島市立吉野中学校教頭)

※ お知らせが遅くなりました。波野中の船間秀仁校長は霧島市立陵南中学校への異動になっていきます。

## 編集

## 後記



問題解決において「共有」することの大切さを再認識した一年でした。子どもたちの学ぶ様子を見ていても、それを感じます。学方・考え方を働かせて深く学ばせるためには、自分自身が何をどのように解決しようとしているのかをモニタリングできるようにすることが有効ですが、独力でそれを遂行することは難しいです。しかし、問いを共有し合っていると、解決方法について情報を提供し合える仲間がいれば、学びの過程における試行錯誤が充実してきます。

私たちも、寄って語り合い「共有」しながら事を進めたいと思うことは少なくありません。しかし、それが難しい日々が続いています。

「月刊 鹿児島島の教育」は、そうした二丁に込める任を担っていることを、本年度最後の編集に携わりながら改めて思うことです。その内容を今更ながら見直してみると、今日の課題の解決に向けての提言、学校経営の実践例、教員としての学びや金言、識見を広げてくれる異業種の方の随想や図書紹介等、多様な情報を「共有」し合うための紙面づくりが営々と続けられてきたことの価値を再認識しました。御多用な中、玉稿をお寄せくださった執筆者の皆様により感謝申し上げます。

今年の寅年は、東洋思想によれば「陽気をはらみ、春の胎動を助ける」歳であるという説もあるとか。皆様にとって、来たる新年度が、そのような年となることをお祈りします。

(喜人小学校 内村英人)